広島大学大学院教育学研究科紀要　第二部　第52号　2003　159－166

隠喩は何をなすのか

杉本　巧

(2003年9月30日受理)

What do the metaphors do / achieve in language activities?

Takumi Sugimoto

What do the metaphors do/achieve in everyday language activities? What function do the conventional metaphors have? This paper described the most fundamental function which the metaphors ("X is Y") do/achieves in everyday language activities. In many studies of the metaphor, it is assumed that the metaphors have so-called "metaphorical meanings" different from literal meaning of the expression. However, there is no evidence that support such premise. This article argued that the metaphors only mean literally. The "metaphorical meaning" is not the meaning of the expression, but evoked by the receiver who accepted the expression "X is Y" literally. Thus the most fundamental function of the metaphors is forcing the receiver to assume <X is Y> with the expression "X is Y". The difference of classification of X and Y produces the feeling which distinguishes metaphors from other expression. The conventional metaphors, which often unnoticed as metaphor, force tacitly so that the members of the society see and treat X as Y. In the society, most part of reality is told by language activities. In such activities, the metaphors offer useful ways of objectivization required for the interactive activity in the society. When he/she became to be able to use the metaphors, the receiver is accepted as a member of the society who shares the reality.

Key words: function of metaphor, language activities, literal meaning, interpretation, reality
キーワード：隠喩の機能，言語活動，字義通りの意味，解釈，現実

0．目　的

隠喩という表現技法は，日常の言語活動において何をなしているのだろうか。

本稿では，まず隠喩の「意味」に関する従来の研究の不適切な前提を指摘する。その上で「XはYである」という隠喩が日常の言語活動において果たす最も基本的な機能について述べる。そして，ほぼ固定化された意味を伝えるだけの働きしかしないと言われることが多い，気づかれにくく慣用的な隠喩が果たしている機能について述べる。

1．隠喩の意味

1.1.「隠喩的意味」

アリストテレスは『弁論術』と『詩学』それぞれで隠喩を扱った。隠喩の弁論における機能と詩的機能とが認識されていたということである。そして，法廷や議会などで使われる弁論のための技術を体系化した弁論術で扱われるということは，説得における「力」が認識されていたことを意味する。

しかし，時代を経て弁論（及び説得）から離れた修辞学は，言述を飾り立てるための技術として扱われるようになり，修辞技法全般を認識を曇らせて真実を覆い隠す技法と見なす立場もあった。ペレルマン（1980）は，既に聴衆を動かし得ない文彩を「文体的文彩」と呼び，「文彩［論型］は具体的状況から切り離され，植物標本の中の色あせた花の如く扱われる時，その動的な役割を見失われて単なる文体の文彩になり終わる」（「　」内p.18）と述べている。

「新」修辞学の先駆けとも言えるリチャーズ（1961）は，隠喩的意味と対置されるような「本来の意味

(Proper Meaning)」観を批判し，隠喩は表現上だけでの問題ではなく「《思想》相互間の借用，交換であり，脈絡間の取引」(p.87) であり「隠喩においては，異なる事物に関するふたつの思想があい共に活動し，(中略) その語や句の意味はふたつの思想の相互作用の結果である」(同上) と述べ，隠喩をいわゆるコンテクストに位置づけて扱うことの重要性を指摘した。にもかかわらず多くの隠喩研究は文レベルでの意味論的な仕組みの説明に終始しているように思われる。それは，隠喩が特別な表現技法であり，表現と一対一の関係にある「隠喩的意味」を表し，それを導き出す過程も特別であることを前提として，「隠喩的意味」の内容と導出の過程を解明することに固執しているからである。

例えばサール (1986) は，発話行為論の枠組において「隠喩の仕組みを説明する，という問題は，話者の表意と文または語の意味とがいかにして分かれてくるかを説明する，という一般的な問題の一つの特殊ケースである」(p.83) として，隠喩の字義通りの意味とは別の，「話者の意図」(同上：p.84) が存在することを前提として議論を展開している。聞き手のするべきことは，話し手の意図の「再現」であることになる。その背景にあるのは，「隠喩には，作者が伝達しようと意図している確定した認知的内容が結びついており，解釈者が隠喩のメッセージに到達するという場合，彼はこの内容を把握していなくてはならない」(森本，1987：p.97) という意味の了解についての態度である。

また「選択制限違反」(チョムスキー，1970) の認定と意義素の操作によって隠喩を説明しようとする試みがある。選択制限違反とは，「俊夫はコンピュータだ」という隠喩文において，コンピュータは人間ではなく [－人間]，俊夫は人間である [＋人間] という点で見出される「不一致」である。山梨 (1988) はこの選択制限違反の認定が隠喩の解釈に重要な影響を与えるとする。山梨は語の意味内容は，中核概念 (その表現の指示対象を生物学的に特徴づける部分) と顕現特性 (その表現の指示対象のプロトタイプを特徴づける部分) に大別され，隠喩の解釈は選択制限違反が認められた後，Y項の中核概念がX項の中核概念によって再構成され，Y項の顕現特性 (「精密さ」や「正確さ」) をX項の中核概念に転写されることが基本であるとする。だが，そのような操作や導き出された解釈は，どのような基準によって「正しい」と言えるのだろうか。

隠喩の隠喩的意味や解釈過程を定式化しようとする立場では，例えば「男は狼である」などの隠喩を言い換えることは隠喩独自の「認知的内容」(ブラック，1986) を失うとし，その具体的な内容は曖昧にしたまま解釈過程を一般化しようとする。あるいは「男は獰猛である」等の暫定的な意味を表していると仮定し，そこに至るまでの解釈手順を一般化しようと試みる。

そのような研究では，記号とその解釈の一対一の関係を前提にしたコミュニケーションモデルを仮定している。そして，通常の表現ではない隠喩も，コミュニケーションに用いられている以上，隠喩でない表現と同様に一義的な解釈 (隠喩的意味) が決定されるべきであるという前提をもつ。そして，そのような立場が抱える問題は，いかなる解釈過程の説明も，正しい答え，すなわち解釈結果を同定しておかなければ，正しいとも間違いだとも言えないということである。

1.2. 字義通りの意味と解釈

果たして「隠喩的意味」と言われるような，隠喩に対応する特別な意味はあると言えるのだろうか。

スペルベル・ウィルソン (1993) は，「関連性 (Relevance) の原理」に支配されたコミュニケーションにおいて聞き手が解釈を構築する仕組みを提案した。

人間の認知は自分にとって「関連」ある情報に注意を払うようにできており，聞き手は話し手が最適な関連性を達成するような発話をしているという見込みの下で発話を処理する。最適の関連性は発話処理に要する労力の大きさと解釈から得られる認知効果の大きさによって算出される。労力が同じであれば認知効果が大きいほど関連性は高まり，認知効果が同じであれば労力が小さいほど関連性が高まる。関連性理論においてコンテクストとは，発話解釈に先立って与えられているものではなく，最適の関連性を達成するために解釈に伴って能動的に発見され構成されるものである。

関連性理論の枠組では，隠喩は「緩い発話 (loose talk)」(年収876万円の人が年収を聞かれて「900万円です」と答えるような場合の発話) の一形態で，関連性を最善にする一つの手段であり，その意味で言語による伝達において極めて一般的な能力の現れであるとする。つまり，隠喩の解釈過程は通常の言語使用と比べて特別とは言えないとする。

関連性理論の立場では，隠喩は「弱い推意の束，すなわち，複数の思考を経済的に伝達する方法」であり，「創造的なメタファーになればなるほど，弱い推意がたくさんできる。推意が少なくて強いほど，そのメタファーは慣習的」(「 」内 東森他，2003：pp.145-146) である。ここでいう「推意」が従来の隠喩論の「隠喩的意味」に当たるものであろうが，それは最適な関連性を目指す聞き手によってその場でコンテクストを能動的に解釈して構築されるのであり，前もって規則的

に決定づけることができるものではないと言える。

一方，デイヴィドソン（1987）は，隠喩は「諸々の語が，その最も字義に忠実な解釈において意味するところのものを意味するのであり，それ以上のいかなるものをも意味するものではない」(p.49）とし，「字義上の意義あるいは意味に加えて，さらにもう一つの意義あるいは意味を持っているという考え」（同上：p.50）を多くの隠喩論が陥っている誤った考えであると批判した。

Davidson（1986）は「コミュニケーションにおける合意形成過程の非還元論的な特性描写」（森本，1987：p.92）を行い，コミュニケーションの特性描写のために「事前理論（prior theory)」と「経過理論（passing theory)」とを区別した。聞き手にとっては，事前理論は「聞き手が話し手の発話を解釈するために前もってどんな準備をしているかを表現」し，経過理論は「聞き手が実際に発話を解釈する仕方」である。話し手にとっては，事前理論は「話し手が解釈者の事前理論がそのようなものだと信じている理論」であり，経過理論は「聞き手が用いることを話し手が意図している理論」である。(以上「 」内Davidson，1986 ：p.442，引用者訳）そしてコミュニケーションの成功のために共有されなければならないのは，事前理論ではなく経過理論である。その経過理論が一致するとき「合意と理解の漸近線」（同上）に達するが，それはどれほど通常の使用からかけ離れたものであっても，うまくいった語や句の使用法を含んでいる。森本（1989）によれば，「経過理論は「いかに束の間の心許ない見取図であれ，それは一定の意味連関を布置する「理論」」（p.135）であり，その語や句の意味は，一時的なものかも知れないが「字義的」なのである[1]。そのような「理論」を仮定するならば，隠喩の意味は字義通りであるということになろう。

関連性理論とDavidsonの論述における発話の「解釈」に共通するのは，ある発話の解釈は事前に存在する規則によって導き出されるようなものではないという点，解釈の仕組みという点で隠喩とその他の表現との間には違いが見出せないという点である。

滝浦（1988）が述べるように，言語的規則とは実際のところ「現実に語られている，あるいは語られてきた言葉の形式的記述」であり，したがって，「まだ語られなかった言語の記述でもなければ，そのような言語の可能性をあらかじめ封ずるもの」（以上「 」内p.10）でもない。実際のコミュニケーションの場面では，表現が文法に違反していることと解釈されることとは異なる問題であり，その場面ごとの実際の解釈を規則によって前もって決定づけることはできない。

発話の適切さは，それが社会的な相互行為の現場において受け入れられ評価されることで決まる。相互行為のコンテクストで使用された時になされる共同体の判断が，適切な使用の基準である。そこで適切であると判断されるならば，通常とは異なる使い方や，隠喩を一例とする「規則違反」の発話も真っ当な発話である。

そして解釈とは一過性の出来事である。言語活動において数えきれない場面・目的において用いられる語の用法は無限であり，その全てを事前に分かっていることはできない。ただ，それは言語の使用に不都合を生じさせるのではなく，記号を一般的に共用できる理由である。そして隠喩の解釈も不確定なコミュニケーションで起こる出来事の一つである。なぜ隠喩の解釈の同定が困難であるかと言えば，それが社会における相互行為の現場でのみつくられるからである。

以上述べたように，コミュニケーションにおける相互理解の仕組みから見れば，隠喩と隠喩でない表現との間に違いがあるとは言えない。そして，解釈の一回性という点からすれば，表現と一対一の関係にあるような「隠喩的意味」があり，それが一般化できないことが隠喩を特別な表現とみなす理由であるとも言えない。

2．隠喩の意味と機能

隠喩の基本的な形式は「XはYである」と仮定される（橋元，1989参照)。この形式は学生である「太郎」という人物について，受け手に「太郎は学生である」と知らせる場合と同じ形式である。では「太郎は学生である」という表現は，その字義以外に何を意味していると言えるだろうか。同様に，「彼は狼だ」という隠喩は，その字義以外に何を意味していると言えるのだろうか。

例えば「犬はほ乳類である」という表現から受け手が推論を経て〈犬は胎生である〉〈犬は足が四本ある〉と考えたとして，それは「犬はほ乳類である」の意味と言えるのだろうか。あるいは，異なる文脈で「犬はほ乳類である」から〈犬はヘソがある〉〈犬は背骨がある〉と考えたからといって「犬はほ乳類である」の意味は別の文脈での意味とは異なるのだろうか。解釈の過程でどのような思考を抱いたとしても，「犬はほ乳類である」はあくまでもその字義通りの意味しか表していないはずである。「XはYである」という表現から，Yについての知識を用いてXについて推論することは頻繁にあるが，そこから得た思考が表現と一対一の関係にある意味とは言い難い。

ある表現を起点とした解釈から生まれる思考をその表現の意味そのものとする誤解は普通の表現について

はなされない。しかし，隠喩論では「隠喩的意味」があるべきという前提があるために，表現の字義を基にして喚起されたものまでも意味に含めようとして議論が混乱しているのである。隠喩の意味として最も適切なのは，「XはYである」が字義通りに表す意味だけであるとしか言えない。表現そのものの意味と，表現を始発点とした状況に応じた解釈との区別に注意しなければならない。

では，隠喩は字義通りに意味を表しているだけなのだろうか。ここで「XはYである」という発話をするときに「行う」ことに注目したい。例えば，ある人物について「彼女は学生である」と言うならば，話し手の発話の意図にかかわらず聞き手に「彼女」を「学生」と結びつけるよう仕向ける。受け手はコンテクストに応じて〈彼女は経済的に豊かではない・責任感がない〉等の「学生」についての知識を使った推論を行うかもしれない。それは，聞き手が「彼女」を「学生」と「見なして」推論を行っているのである。「彼女」を「学生」として扱っているとも言える。実際にある発話から聞き手が何を推論するのかはコンテクストに依存しており一般化できないが，送り手と協調的な関係を築くために，「XはYである」と言われた時には，受け手は最低限XをYと見なすことを受け入れてコミュニケーションに臨むことが期待されるはずである。

そして，「XはYである」という隠喩が用いられたときも同様である。隠喩の受け手は，まずXをYと見なすよう仕向けられるのであり，その意味では隠喩は「行為」をしていると言える。つまり，隠喩の最も基本的な機能は，受け手にXをYと見なすように仕向けることである。XをYと見なしたならば，コンテクストに適合する限りでXの扱い方をYの扱い方と同じにするだろう。

このような隠喩の機能は，その発話に込められた送り手の意図に必ずしも顕在的に含まれているものではない。例えば，隠喩は説得（「彼は狼だから一緒にドライブに行かない方がいい」）に用いられうる。当該の対象を別の対象として見なすよう仕向ける（「彼」を「狼」と見なす）機能を持つ隠喩を用いることにより，発話により説得力を持たせる（例えば「彼が狼であるならばドライブに行くのは危険である」など）ことができる。また，質問（「彼は狼だろうか」），要請（「君には狐ではなく虎になって欲しい」），皮肉などのために使われうる。これらの言語を用いた行為は，XをYと見なすよう仕向ける隠喩の機能が果たされることを前提として遂行される。言い換えれば，隠喩を用いて，XをYと見なさせ，Xに対する振る舞いをYに対するのと同じにさせることがその後の別の行為の背景となるのである。

ただ，XをYと見なすよう仕向けるという機能は，隠喩独自であるとは言えない。隠喩が形式を同じくするその他の表現方法と異なる感覚を伴って受け取られる理由は，それが進行中のXについて述べるコンテクストの中に経験上異なる分類の関係を持つようなYを持ち込むためである。それは，ある語をその語にとってあまり「なじみのない」文脈に移動させることとも言える。その際，語は「なじみのある」，つまり連想的な関係にある文脈も引き連れて移動し，様々な推論を導きうる。コンテクストにとって異質なものを持ち込むことは「異化効果」を生み出す。異化効果とは，「外界の現象として予期していなかったものが，人の心の中に及ぼす心的な影響」のことで，「その影響は心的な衝撃・ショック choc として様々な種類と程度において現れる」（「　」内ラウスベルク，2001：p.63）ものである。この点については，既存の分類との齟齬を生じることによる違和感が提喩には感じられないことと対照をなす。隠喩はXをYと受け手が見なすよう仕向ける。しかし，その結びつきは経験的に「XはYではない」ことも同時に含んでいる。ハンデルマン（1987）が指摘しているように，「隠喩的真理の中心的特性は，それが〈……である〉の内部に〈……でない〉を保持して」（p.56）おり，隠喩は「いかなる所与の概念の中にも同一性と差異性の間の抗争と緊張を提示する」（同上：p.57）と言えよう。

以上をまとめると，既存の分類を越えてまでXをYと見なすよう仕向けること，そして受け手に見なさせることによってXをYとして扱うよう仕向けることが隠喩の最も基本的で独自の機能であると言える。

3．慣用的な隠喩

ここでは日常的に使われ，ほとんど気づかれることのない隠喩を慣用的な隠喩と呼び，その機能を明らかにする。

3.1．認知意味論

大堀（2002）は，認知言語学の立場から，言語による伝達の土台を成しているのは人間の基本的な認知能力であり，隠喩は「認知活動に深く根を下ろした，意味拡張の最も強力なプロセス」（同上：p.78）であるとする。

レイコフ・ジョンソン（1986）は，日常的に用いられている「時間を浪費する」「理論を組み立てる」などの慣用的な隠喩を主な分析対象とした。彼らの主張では概念形成や概念体系においてこそ隠喩本来の機能

があり，言語表現は二次的で表面的なものである。隠喩の本質は，ある事柄を他の事柄を通して理解し，経験することである。隠喩はその対象となる概念の一側面の理解を与え，行動や認識にも深く関与する。隠喩による理解とは起点領域から目標領域への構造の写像によって得られるものであり，その写像の結果生じた概念間の対応の束は概念メタファー (conceptual metaphor) と呼ばれる。

そして，概念メタファーは，ある文化の中にいる人々にとって共有の概念装置である。〈ARGUMENT IS WAR〉〈GOOD IS UP〉〈BAD IS DOWN〉〈LOVE IS A JOURNEY〉等，多くの概念メタファーが提示されている。以下に〈LOVE IS A JOURNEY〉をの例を挙げる。(渡部他訳：p.68)

1）Look how far we've come.
（ごらんぼくらの愛が乗り越えてきた幾山河を。）
2）We're at a crossroads.
（二人は岐路に立っている。）
3）We can't turn back now.
（ぼくらはもう引き返せない。）

これらの表現から〈恋愛〉の概念が，別の領域に属する，より具体的な概念〈旅〉によって構造を与えられ理解されているとされる。そして「現実には観察できないものにも構造が与えられる，こうした構造化の力は，抽象概念の中に細部にわたる要素や相互関係を創造し，新たな「まことらしさ」を生み出す」(大堀，2002：p.78) とされる。

概念メタファーは日常的に無意識に用いられるからこそ「生きている」のであり，新しいように見える詩的な隠喩も既に獲得している概念構造を基盤としているとされる。非常に影響力のある主張だが，本研究の観点から，いくつか問題点を指摘したい。

概念メタファーの形成は身体経験や人間の認知的特性を根源的な基盤にしていると言われており，従って言語形式にも身体的・認知的な動機付けが反映されているとされる。「言語の発現に先立って，身体が外界と非言語的に交流し，そこから意味を，ボトムアップ式にくみ出してくる」(青木，2002：p.89) という考え方である。

しかし，認知と言語，身体性と言語との写像関係は必ずしも自明視されるものではない。表現体系において，〈愛〉と〈旅〉など異なる領域間で共通性が見られるからといって，単純に〈愛〉と〈旅〉との間に概念構造におけるつながりがある，あるいは〈愛〉と〈旅〉とが同じ理解をされているとは言えない。言語の研究は「概念」なるものを直接観察しているのではないという点で慎重な議論が必要である。この点について，菅野 (2003) は「身体と環境との相互作用のただなかに創発するイメージ図式のリアリティを認めるとして，では〈図式〉から〈言語〉への展開がどのようになされているのか，この言語の起源の問いに認知言語学が十分な説明を与えているとは思えない」(p.223) と指摘している。青木 (2002) は「慣習的な言語表現が，概念レベルでメタファーに従っている」(p.35) と述べているが，「概念が慣習的な隠喩に従っている」という捉え方も一方で可能である。

認知意味論は人間を中心におくことを声高に主張しながら，その人間は社会から切り離され理想化された人間でしかない。人間の使う言語が人間中心にできており，身体性や認知の仕組みに影響され，その痕跡が観察されることはあるだろうが，人間の言語の探求において，生物としての人間個体の認知能力もさることながら社会的な基盤を無視することは出来ない。菅野 (2003) は認知意味論に欠けるものとして「「コミュニケーション」の視角から認知を解明しようとする姿勢」(p.227) を挙げ，「認知があたかも純粋に一人称の出来事であるかのように，あたかも私の行為の相手などまるで存在しないかのように，図式，隠喩的投射，理想化された認知モデル，焦点合わせ，等々の概念が繰り出されている」(同上) と指摘している。まず言葉があってコミュニケーションがあるのではなく，コミュニケーションをするために言葉が必要となるのである。認知構造や身体性がどれほど言語体系に影響するかについては，認知諸科学の発展を待つしかないが，本稿では社会的な相互行為における有用性という点から慣用的な隠喩の機能について考察する。

3.2. 慣用的な隠喩の機能

3.2.1. 現実と言語

通常我々は「私」にとっての日常生活の現実は，他者にとっても現実であることを自明視している。西垣 (1994) が指摘するように，他我間で「心の中身」が直接分からないからこそ，お互いに了解できる「現実」が必要となる。そのような日常生活において立ち現れる現実は，その構成員が属する社会の文化や歴史によって規定されている部分が大きい。そして，西垣 (1994) が「われわれが互いに環境世界イメージを伝え合うところから〈リアリティ〉が生まれ」，「主観性の域をこえて社会的に通用するから「客観的現実」となる」(p.120) と述べているように，コミュニケーションは構成員にとっての社会的な現実を構成する際に重要な働きをする。

日常生活における現実の社会的構成について論じたバーガー・ルックマン（2003）によれば，日常生活の現実は間主観的な世界として「その場面への私の出現に先立ってすでに対象として資格づけが行われた諸対象の秩序によって構成されたものとして」（p.32）現前する。そして，日常生活と不可分である言葉は，単に中立的な伝達の道具であるのではなく，日常の現実の構成に欠かせない役割を持つ。

言葉は，社会で共用されることによって出来事や経験の類型化の枠組となり，直接その経験をしていない構成員にも経験を伝えることが可能となる方法を提供する。その点で，社会において言葉とは「意味と経験の厖大な蓄積の客観的な貯蔵庫」（同上：p.58）であるといえる。そのような言葉によって「貯蔵」されている日常生活に必要な知識は，他者との言葉によるコミュニケーションを中心とした日常的な相互行為を通じて獲得される。

日常生活の〈ここといま〉から分離可能である言葉によって，〈ここといま〉から離れた経験でも対象化し，コミュニケーションの場に現前させることができる。言葉は「柔軟性に富んでいて，私の生活過程のなかで生起する極めてさまざまな経験を対象化することを可能にしてくれる」（同上：p.60）。「私」の経験を言葉で表すことは，それが他者にも接近可能なものとして対象化されていることを意味し，他我間での経験の共有を感じさせる。ということは，〈ここといま〉の主観的な経験でも，日常的に使われている類型化の枠組によって，すなわち他者も知っている言葉によって表さなければ，他者にとって接近可能なものとはならない。そして他の成員に承認されるような言葉の使用が可能となることが社会の正当な成員としては要求される。

また，言葉はその類型化・対象化の作用によって高度に抽象化されたさまざまな象徴であっても日常生活に還元し，「日常生活における客観的に現実的な要素」（同上：p.63）として提示する。例えば，科学や宗教，芸術など抽象的で高度な象徴体系をもつ世界であっても，それは日常生活と同じ言葉で表されることによって，成員にとっての日常世界の現実として取り込まれる。

以上述べた中で，言語による「意味」や「経験」の伝承の具体的な仕組みや，言語と思考・経験との関係については慎重な検討が必要である。ただ，少なくとも日常で頻繁に現前する対象の，ある状況における類型化や対象化の仕方，つまり公共の言語による対象の「扱い方」は成員間で似通ったものとして伝承されていなければならない。そうでなければ，言葉は日常で必要とされるほどにはスムーズに通じない。

そして，ある成員がコミュニケーションにおいて言語を話せる，理解できる，つまり「使える」と認められるためには，コミュニケーションに携わる他の人々と同じ言葉を同じ仕方で使い，同じことができるようになることが必要である。言葉が適切に使えるということは，その言葉をコンテクストと適切な関係において使えるということであり，その適切さは言語による状況に応じた対象への焦点の当て方や類型化の仕方，あるいは連語や語彙的なつながりなどがその判断基準に含まれる。そして，同じ対象について同じ言葉で同じことができるようになっていると実感されることは，現前する諸対象の秩序を自他共に理解している，すなわち共有しているという感覚を生む。そのようなコミュニケーションを日常的に試行錯誤的に繰り返す中で，多くの他者と「現実を共有している」という感覚を得て，その社会の中で成員として「うまくやっている」ことが実感される。さらにコミュニケーションの成功を重ねることが，自らが抱いている「現実」の社会的な確実さ，「客観性」を感じさせるのである。

以上のように，社会の成員はコミュニケーションを通して，日常生活の遂行に必要な対象についての言語による対象化の仕方や言語による「扱い方」を習得し，それを実際に使っていくことで自らの現実を構成し他者との共有を確認する。そして，言語体系に組み込まれている慣用的な隠喩は，言葉の柔軟性を基に様々な経験を対象化・類型化して，社会的に蓄積し伝えていく方法の一つである。

3.2.2. 隠喩と現実

2で述べたように，隠喩は「XはYである」を基本形式とし，話題となっているXを経験的に異なる分類が為されているYと見なすよう仕向ける。

そして，隠喩は受け手の行動あるいは思考を誘導しうる。例えば「時は金なり」という隠喩は，「時」を「金」と見なさせて，「時間は貴重で限りがあり，浪費すべきではない」などの態度や思考を導き得る。

言語表現は一般に当該の対象のある側面だけに焦点を当てさせ，その他の側面は抑制するが，隠喩の場合には，経験的に分類が異なるYを通して焦点を当てさせる。例えば「太郎はゴリラだ」と言われれば，「太郎」のゴリラ的側面が強調され，その他の側面は抑制される。「人間は機械である」と「機械は人間である」が両立可能であるのはたとえる対象としての「機械」と「人間」が，それぞれ別の側面を浮き立たせ，他の側面を抑制するからである。これらの隠喩の基本的な機能と派生的な機能は，慣用的な隠喩においても見られる。

慣用的な隠喩とは，まず第一に当該の文化・社会において伝承されてきた表現の「型」である。武田（1992）

は，ことわざを始めとする定型句について「人びとが社会生活を営んでいく中で繰り返し出会う，似たような場面・状況に対処していくためのことばの公式として，自然のうちに生み出され，かつ伝承されてきたものである。したがって，定型句を使うことはきわめて社会的な行為でもある」(p.15) と述べている。慣用的な隠喩についても同様のことが言えるだろう。

慣用的な隠喩は，慣用的であるという点で，ある対象について社会的に認められた既成の表現方法として，秩序立てられた類型化の枠組として用意されていると言える。そして社会的な相互行為の中で成員に伝承される。慣用的な隠喩による扱い方の伝承は，「愛」「正義」のように実在に準拠しない抽象的な対象に顕著に見られる（「愛で包み込む」，「正義を振りかざす」）。また，瀬戸（1995）で分析されているように，「時間」についての語彙は「空間」「資源」などに使われる語彙と共通するものが多い。それは「時間」を空間的に等分し，その区切りに従って行動する基盤となるような言語による時間の扱い方を伝えている。科学の言説における隠喩の例として挙げられる「電流」についても，その直接的には理解しにくい物理的な仕組みはどうあれ，日常生活においては液体等と同じく電気は「流れている」と表現される。これらのような抽象的な対象や直接的な理解が困難な対象であっても，秩序立てられた類型化の枠組があることによって対象化され，コミュニケーションの場に現前させることができるのである。これらの隠喩を用いて描かれる対象に関しては，日常的に必要な側面のみに焦点を当てるよう仕向けられている。多くの成員の社会生活にとっては，「愛」や「時間」など隠喩のX項に当たる対象の実体が何であるかではなく，それらをどのような方法でXを対象として取り込みコミュニケーションにおいて扱うかが差し迫った問題である。その「実在」がどのようなものであろうと，社会の成員にとっては，言葉が通じる限りにおいて，それぞれが共有されていると見なしている姿が「現実」である。

様々な対象を対象化し，現前せしめる方法として隠喩が慣用化されているということは，それらの対象に関する隠喩によって構成された秩序が，社会的活動において有用であることが認められているということである。実際の社会的活動において直面する状況で不都合が起こらなければ，それ以外の扱い方は必要ではない。

慣用的な隠喩が言語体系に組み込まれていることにより，抽象的な対象であっても対象化され，社会の成員の日常生活に取り込まれることが可能になる。慣用的な隠喩が類型化の枠組として受け入れられていることが信じられることによって，X（例えば「理論」）をY（例えば「建築物」）として扱うかのような表現（理論の「土台」や「柱」）を会話に持ち込んでもスムーズに受け入れられ，理解されるはずだという期待が成員間で抱かれる。慣用的な隠喩によって様々な対象や経験を類型化し対象化する表現体系が社会的に蓄積され，社会の成員にとって接近可能となり日常のコミュニケーションで正常に使えるからこそ，抽象的な対象や経験であっても他我間での共有を確認し，現実を構成する要素としてコミュニケーションで扱うことが可能となる。

そして，慣用的な隠喩は単に言語的な扱い方を提示するだけでない。それは，新しい隠喩のような「違和感」を伴うことなく提示され，隠喩であるとは気づかれにくいからこそ類型化の枠組として有効になる。公共の言語による対象の「扱い方」は成員間で似通ったものとして伝承されていなければならない。慣用的な隠喩は，慣用的であるという点で社会的に認められたものであり，社会的な相互行為の中で当然受け入れるべきもの，使えるようになっているべきものとして日々使用されている。従って，社会の構成員はそれと気づかないうちに，その隠喩による扱い方に従うよう仕向けられているのである。隠喩はその字義ゆえに「XはYではない」を含み，容易に「違和感」に気づかれうるが，その不一致に気づいたとしても慣用化されたものと別の扱い方は実際のコミュニケーションにおいて「うまくやれない」危険性を伴うことになり，「XはYである」かのような扱いをすることが日常の社会生活では最も妥当なのである。

以上の考察から，慣用的な隠喩にもXをYと見なすよう仕向けるという機能があると言えよう。

4．まとめとして

以上，言語活動において隠喩がなすことについて述べた。

まず，「XはYである」という隠喩の最も基本的な機能は，受け手がXをYと見なすよう仕向けることである。XとYとが経験的に異なる分類をなされていることが隠喩をその他の表現から区別する感覚を生み出す。従来の研究で前提されていた「隠喩的意味」とは，「XはYである」と見なすことを受け入れた受け手が呼び起こすものであり，隠喩そのものの「意味」とは呼べない。

慣用的な隠喩は，暗黙のうちにその社会の成員にXをYとして扱って社会生活に臨むよう仕向ける。成員は，隠喩で構成された対象化の方法を受け入れ，社会の成員として妥当な行為を重ねることを通して，当該

の対象についての現実を共有していることを実感し，社会的な相互行為に参加することができるのである。

【注】

1）「二つの言語的ないし言語学的要素（たとえば二つの語）を関係づけることによって，これまで知られていなかったひとつの関係構造の場を形成することを通して，ひとは，そこで，たんに既成の系列を顕在化せしめるというよりは，むしろ，あらたな系列ないしあらたな範列を創り出す」（坂部，1989：p.138）。

【参考文献】

青木克仁（2002）『認知意味論の哲学』大学教育出版

バーガー，P．L．・ルックマン，T．（山口節郎訳）（2003）『現実の社会的構成－知識社会学論考』新曜社

ブラック，M．（尼ヶ崎彬訳）（1986）「隠喩」佐々木健一編『創造のレトリック』勁草書房，pp.2-29.

チョムスキー，N．（安井稔訳）（1970）『文法理論の諸相』研究社

デイヴィドソン，D．（高頭直樹訳）（1987）「隠喩は何を意味するのか」『現代思想』15-6, pp.49-69.

Davidson, D. 1986. A nice derangement of epitaphs. In E. Lepore (ed.) *Truth and Interpretation: Perspectives on the Philosophy of Donald Davidson,* pp.433-446. Basil Blackwell.

ハンデルマン，S．A．（山形和美訳）（1987）『誰がモーセを殺したか：現代文学理論におけるラビ的解釈の出現』法政大学出版局

橋元良明（1989）『背理のコミュニケーション：アイロニー・メタファー・インプリケーチャー』勁草書房

東森勲・吉村あき子（2003）『関連性理論の新展開－認知とコミュニケーション』研究社

レイコフ，G．・M．ジョンソン（渡部昇一・楠瀬淳三・下谷和幸訳）（1986）『レトリックと人生』大修館書店

ラウスベルク，H．（萬澤正美訳）（2001）『文学修辞学：文学作品のレトリック分析』東京都立大学出版会

森本浩一（1987）「隠喩とコミュニケーション－デリダとデイビッドソンの場合－」『現代思想』15-6, pp.90-104.

森本浩一（1989）「他者を理解する技倆－再度「コミュニケーション」について－」『現代思想』17-3, pp.130-142.

西垣通（1994）『マルチメディア』岩波書店

ペレルマン，C．（三輪正訳）（1980）『説得の論理学：新しいレトリック』理想社

リクール，P．（久米博訳）（1998）『生きた隠喩』特装版 岩波書店

リチャーズ，I．A．（石橋幸太郎訳）（1961）『新修辞学原論』南雲堂

坂部恵（1989）『鏡のなかの日本語：その思考の種々相』筑摩書房

サール，J．R．（渡辺裕訳）（1986）「隠喩」佐々木健一編『創造のレトリック』勁草書房，pp.82-140.

スペルベル，D．・D．ウィルソン（内田聖二・中逵俊明・宋南先・田中圭子訳）（1993）『関連性理論：伝達と認知』研究社出版

菅野盾樹（2003）『新修辞学－反〈哲学的〉考察』世織書房

杉本巧（2001）「「隠喩性」について」『広島大学日本語教育研究』11，pp.95-102.

滝浦静雄（1988）『メタファーの現象学』世界書院

武田勝昭（1992）『ことわざのレトリック』 海鳴社

内山和也・杉本巧（2002）「隠喩が意味を失うとき」『広島大学日本語教育研究』12，pp.75-82.

山梨正明（1988）『比喩と理解』東京大学出版会